

# 潟語り (三十一)

文・小西 一三  
絵・小西 由紀子

## 冬のシジミ漁のこと

天王字御休下の桜庭耕一さんは昭和八年生まれ。働き過ぎて四十代で体調を悪くした父親を助け、小学校高等科の頃から潟でさまざまな漁をしてきました。冬のシジミ漁についてお聞きしました。

### 白鳥の近くには

### 大きなシジミ貝だけあったもんだ

八月から十二月頃まではゴリふき（曳き）。それが終われば潟が凍るまで、葦の際に網を刺してグンシ（ハゼ）やヒゴ（セイゴ）を獲ったもんだ。

潟が凍ればシジミ貝の腰つびき。潟の奥は完全に凍るとも、橋の手前は塩水が濃いから氷は薄いし、氷の張らね所もあった。そんな場所の岸側を引いたもんだ。胴付きはいてマンガを腰で引つ張つてな。冷える時だば、胴付きの腰のひもが凍つてしまつて、ひもがほどがれねほどだった。

その頃になれば、氷の張らね場所に白鳥も集まつてきた。白鳥もまま食わねばなんねべ。奴らは小さなシジミ貝やガツギの根つこなんか食うもんだもの。だから、白鳥が盛んに餌を食っている下にはシジミ貝がある。それに奴らは小さいシジミ貝しか食わねもんだがら、大きなものだけが残る。そんな場所は俺らにとって有り難い。だから、白鳥の浮かんでいた場所を引つ張つたもんだ。「白鳥さん、ありがとう」つてなもんだな。

昼は握り飯。体を動かしていねば体が冷えるもんだがら、飯

はさつさと食つて、すぐにマンガを引つ張る。冬のシジミは泥の底の方にいるもんだもの、二斗も獲ればまあまあだったな。家に帰つて「通し」で選別し、やつと仕事が終わる。体が冷えているもんだがら、そのまま銭湯に行く。当時は風呂のある家などほんどねえ。銭湯は二つあったども、俺は「松の湯」の方に行つた。気持ちいいがったなあ。同じシジミ貝獲る漁師もいつべ来ていて、俺はなんぼ獲つたどが、あの場所が良かったどが、いろいろ話をしながら湯つこに入つてな。

あの頃のシジミはそう金にはならねがったども、他に獲るものがねえもんだもの。冬だからつて休んでいらねべ。そうこうしているうちに三月になる。そうすれば今度は北海道のニシン場に稼ぎに行く。干拓が始まるまでこんな生活が続いたもんだよ。



冬の間は網も作った  
重りには貝殻を使  
っている

この貝は浜に  
行って拾つて来た  
もの。「貝殻拾う  
のも仕事だったよ

奥さんの  
カツエさん